

受胎困難な黒毛和種未経産牛の飼養管理に関する考察

淡路基幹家畜診療所

○住 伸栄 笹倉春美 長谷川弘哉 山本直史 黒木智成
藤本修司 今井正士 橋本宰昌 大平正信

黒毛和種の未経産牛が受胎困難な場合、初回分娩の遅延による経済的損失に加え、繁殖供用不可となれば貴重な優良因子の喪失にもつながる。そこで、受胎までに治療を要した兵庫県産黒毛和種未経産牛について検討を行った。

材料および方法

1. 受胎までに治療を要し2008年4月から2009年10月までに受胎したかまたは予後不良となった未経産牛50頭について、繁殖カルテを調査した。
2. 2010年4月以降治療した未経産不受胎牛4農場4頭(A～D)の飼料給与状況を調査した。

結果

1. 治療牛50頭中37頭は初診時未授精(未授精群)、13頭は治療を受けずに授精されたが不受胎(授精群)であった。未授精群の平均初診日齢は 404.2 ± 32.41 で、初診から20日未満で4割以上が、60日未満で7割以上が受胎した。授精群の平均初診日齢は 488.3 ± 55.31 で、3頭は受胎せず繁殖供用中止となり、そのうち1頭については染色体検査を行ったが異常を認めなかった。授精群のうち受胎した10頭では、初診から60日以降に7割が受胎した。
2. A～Dの育成初期に給与していたTDNは3.61, 3.77, 3.77, 4.99kgで予想されるD.G.はそれぞれ0.6, 0.7, 0.7, 0.8, CPは680, 587, 678, 884gで予想D.G.は0.6, 0.5, 0.6, 0.8であった。調査時の14, 15, 19, 21ヵ月齢にはすでに給与量を減量しTDNが3.27, 3.22, 3.22, 4.29kgで予想D.G.は0.2, 0.2, 0.2未満, 0.4, CPが610, 475, 566, 754gで予想D.G.は0.3, 0.2未満, 0.2, 0.5であった。A～Cは調査後40日以内に受胎した。

考察

今回調査した治療を要した未経産牛50頭において最終的に受胎しなかった牛は、未授精群では0%であったのに対し授精群では23%と高率であった。授精群では7割が初診から受胎まで、飼料給与の内容が反映される60日以上かかったこと、染色体検査を行った牛には染色体異常が無かったことから、これらの牛には栄養面の問題があると推察した。給与飼料の調査では、A, Bは育成初期に過給した結果、過肥であると認識し授精開始月齢以降に飼料給与量を減量していた。飼料要求量は成長とともに増加するにもかかわらず過肥であるからと逆に減量するという、場当たりの飼料給与がさらに続けば、受胎を遅らせる可能性があった。C, Dは登録検査が終了するまで飼料を減給せず受胎が遅れたと考えられる。育成牛の飼養管理について正しい知識が伝えられていないことが問題であると考えた。